

森のふくろうへの独言

柳田国男「涕泣史談」より

小田富英

届くか

わが無音の独言

訊けるか 翁の再生の詩

翁がなぜ

政治と戦鬪の時代のとば口で

泣くことの歴史に

こだわったのか

やつとわかつた

同じような

きな臭さのなかで

一条の光明にも似た言葉が扉を開ける

この眼前の人生の

細やかな変わりようと

この現実の生活を

より感銘深く

そしてしんしんと記憶していく

よき故老をつくらねばならぬと

老いて後銘々の愛する人の為に詳しく語り得

る観察に無私のオールドマンに我はなれるか

そう言えば五十年も昔のこと

満員電車の中で泣く子を男の子だから泣かずに我慢

とあやした母に向かった小さ子の男つてつらいんだ

ねの言葉に誰もが自然とほえんだことを思い出す

翁がその場にいたら

女だつたら泣いてもよい世相や

泣く子は育つの民俗知を

つぶやいただろう

男も女もないとする

この時代を無私の観察で

五十年先に届けるもの

何を記憶できるか

今も

誰にも気づかれずに泣く子らと

涙も流せずただ降る光線を睨む子らがいることを

我らは反省の学としての歴史に刻むだけでよいのか

